

H. Gauss.

スターリン全集刊行会訳

スターリン全集

第八卷

大月書店刊

ス タ ー リ ン 全 集

一九五二年六月二十日發行

定價 四八〇圓

訳 者

スターリン全集刊行会

發行者

東京都文京區本郷一ノ五
小林直衛

第 八 卷

印刷者

東京都千代田區内幸町二ノ二〇
株式會社太平印刷社

製本者

東京都千代田區錦町三ノ二四
株式會社田中製本所

發行所

東京都文京區本郷
一丁目一五番地

大 月 書 店

電話小石川(85)三〇九一番
振替・東京一六三八七番

訳者はしがき

一 本巻は、ソ同盟共産党（ボリシエヴィキ）中央委員会付属 マルクス・エンゲルス・レーニン研究所編集の『イ・ヴェ・スターリン全集』第八巻の翻訳である。

一 スターリンの原注は*をもつてしめす。そのほかの注は、日本の読者の便宜を考え、原書の編集者注を参考にして、訳者がつけたものである。ごく簡単な注は角がつこ「」にかこんで本文中にいられたが、他は事項注と人名注とにわけ、本文のおわりに一括してつけた。人名は本文のなかに出てくるかぎり、原則として、すべて注をつけることにした。事項注は本文に出る注番号の順に、人名注は「アイウエオ」順に、それぞれ排列した。

一 原文のゴシック体の箇所は訳文でもゴシック体にし、隔字体の箇所には傍点をつけ、頭文字だけで組んである箇所は活字をいちだん大きくした。ただ見出しのところは、かならずしもこの方針によらなかった。

一 本文のうえの欄外にある算用数字は、翻訳底本とした原書のページ数をしめす。

一 全集版原書では、『レーニン全集』からの引用のばあい、その第三版の巻数とページ数がしめしてあるが、翻訳にあたっては、それらをすべて第四版の巻数、ページ数にあらためた。

一 邦訳の参照は、マルクスとエンゲルスについては、『マルクス・エンゲルス選集』（大月書店版）、レーニンについては、『レーニン二巻選集』（社会書房版）によった。したがって、角がつこ「」中の巻数、分冊数、ページ数は、右の二つの選集の巻数、分冊数、ページ数である。

一 全集版の本文と『レーニン主義の諸問題』との重要な異同については、『レーニン主義の諸問題』第十一版にあつて『スターリン全集』第八卷にないものを『』によつてしめし、『スターリン全集』第八卷にあつて『レーニン主義の諸問題』第十一版にないものを『』によつてしめした。

一 人名、地名は現地の発音にちかく表記することを原則としたが、慣用のものについては、それをもちいたばあいが多い。

一 翻訳は、それぞれ担当の訳者がまず訳出し、これに校閲者団が、各国語訳および邦訳をも参照しつつ、厳密に校訂をくわえ、さらに術語、用字、文体などの整理、統一をおこなつて、完成したものである。

(V)

序 文

イ・ヴェ・スターリン全集第八巻には、一九二六年一月から十一月までに書かれた著作がおさめてある。

一九二六年は、国の社会主義的工業化にたいする党とソヴェト権力との一般方針を遂行するために、ボリシェヴィキ党が斗争を展開した最初の年であった。

スターリンは、『レーニン主義の諸問題によせて』および『ソ同盟の経済情勢と党の政策について』という労働のなかで、ジノヴィエフ・カメネフ一派がレーニン主義の基礎にくわえた敵意ある歪曲をあばき、ソ同盟共産党（ボ）第十四回大会の決定をまもり、ソ同盟における社会主義の勝利の事業にたいする不信を党内に伝染させようとする「新反对派」の企てをあばいている。

『わが党内の社会民主主義的偏向について』という、ソ同盟共産党（ボ）第十五回全国協議会での報告と、この報告の結語のなかで、イ・ヴェ・スターリンは、ボリシェヴィキ党の思想および組織的統一をまもり、トロツキー・ジノヴィエフ・ブロツクの降伏主義的イデオロギーと分派的破壊活動をあばきだしている。

イ・ヴェ・スターリンのこれらの著作のなかでは、個々の国における社会主義の勝利の可能性にかんするレーニンの学説が展開され、資本主義的包囲という諸条件のもとでソ同盟に社会主義社会を建設しとげる可能性、必然性および国際的意義が基礎づけられ、社会主義建設にかんする党の実際の任務が指摘され、国の社会主義的工

業化をめざす党の一般方針を遂行する具体的な道と方法とが規定されている。

『イギリスのストライキとポーランドにおける諸事件について』、『イギリスロシア統一委員会について』、『右翼の偏向および「極左的」偏向にたいする斗争について』、『コミンテルン執行委員会第六回拡大総会のドイツ委員会における演説』という著作やその他の労作のなかで、イ・ヴェ・スターリンは、労作者階級の統一のための、帝国主義的反動に反対するための、また新たな帝国主義戦争の危険に反対するための、根気のよい、徹底的な斗争をおこなう必要を強調し、そして、まだおわっていない運動をとびこえようとするトロツキーの冒険主義的理論をあばき、諸外国の共産党内の日和見主義にたいする思想のおよび組織的斗争の道と方法を指示している。

『中国革命の見通しについて』という演説のなかで、イ・ヴェ・スターリンは、中国革命の特質と、その性格および方向を明らかにしている。

第八巻には、はじめて発表される文書、すなわち『労作者階級の同盟軍としての農民層について』、『わが国における社会主義建設の可能性について』、『コミンテルン執行委員会第六回拡大総会のフランス委員会における演説』、『イギリスロシア委員会について』の演説、『スレプコフへの手紙』、『党内斗争の緩和策について』、『アメリカ労働党中央機関紙「デイリー・ワーカー」の編集部へ』あてたイ・ヴェ・スターリンの手紙などがおさめられている。『同志カガノヴィチその他のウクライナ共産党（ボ）中央委員会政治局員に』というイ・ヴェ・スターリンの手紙も、完全な形で発表されている。

ソ同盟共産党（ボ）中央委員会付属
マルクス・エンゲルス・レーニン研究所

目次

5 目 次

序 文	三
右翼的偏向および「極左的」偏向にたいする斗争について	一五
一	一五
二	一九
論文集『レーニン主義の諸問題』第一版の序文	二五
レーニン主義の諸問題によせて	二七
一 レーニン主義の規定	二七
二 レーニン主義における主要点	三〇
三 「永続」革命の問題	三三
四 プロレタリア革命とプロレタリアートの独裁	三六
五 プロレタリアートの独裁の体系内での党と労働者階級	四〇

六 一国での社会主義の勝利の問題	八三
七 社会主義建設の勝利をめざす斗争	一〇一
労働者階級の同盟軍としての農民層について	一二八
わが国における社会主義建設の可能性について	一三三
同志コトフスキーについて	一三六
コミンテルン執行委員会第六回拡大総会の フランス委員会における演説	一三八
国際共産主義婦人デーによせて	一三六
コミンテルン執行委員会第六回拡大総会の ドイツ委員会における演説	一三八
ソ同盟の経済情勢と党の政策について	一四六
一 ネットの二つの時期	一四七
二 工業化の方針	一四九

三 社会主義的蓄積の諸問題	一五二
四 蓄積の正しい利用。節約政策	一五八
五 工業建設者のカードル「要員」をつくりださなければならない	一六六
六 労働者階級の積極性をたかめなければならない	一六八
七 労働者と農民との同盟を強化しなければならない	一六九
八 党内民主主義を実行しなければならない	一七三
九 党の統一をまもらなければならない	一七三
一〇 結 論	一七四
同志カガノーヴィチその他のウクライナ共産党（ボ）	一七八
中央委員会政治局員に	一七八
イギリスのストライキとポーランドにおける諸事件について	一八四
なぜイギリスにストライキがおこったか	一八四
なぜイギリスのゼネストは失敗したか	一八九
ゼネストの教訓	一九三
いくつかの結論	一九五
ポーランドにおける最近の諸事件について	一九七

チフリスの主要鉄道修理工場労働者の歓迎に答えて	二〇三
イギリス⇨ロシア統一委員会について	二〇六
エフ・ジェルジンスキー	二一六
イギリス⇨ロシア委員会について	二一八
アメリカ労働党中央機関紙『デイリー・ワーカー』の編集部へ	二二八
スレプロコフへの手紙	二四〇
党内斗争の緩和策について	二四三
ソ同盟共産党（ボ）内の反対派ブロックについて	二四九
一 わが革命の性格と見通しにかんする基本的な問題で「新反対派」は トロツキズムへ移行していること	二五一
二 反対派ブロックの実践綱領	二五六
三 反対派ブロックの「革命的」な言葉と日和見主義的な行動	二六三

四 結 論 二六六

わが党内の社会民主主義的偏向について 二六八

一 反対派ブロックの発展の諸段階 二六八

一 第一の段階 二六九

二 第二の段階 二七〇

三 第三の段階 二七二

四 第四の段階 二七四

五 レーニンと党内のブロックの問題 二七五

六 反対派ブロックの解体の過程 二七七

七 反対派ブロックはなにを期待しているか 二七九

二 反対派ブロックの基本的な誤り 二八一

一 まえもって注意しておくこと 二八三

二 レーニン主義かトロツキー主義か 二八八

三 ロシア共産党（ボ）第十四回協議会の決議 三〇三

四 「新反対派」のトロツキズムへの移行 三〇七

五 トロツキーの逃げ口上。スミルガ、ラデック 三二三

『わが党内の社会民主主義的偏向について』の報告の結語

- 六 わが建設の見通しの問題のもつ決定的な意義……………三三八
- 七 反対派プロツクの政治的見通し……………三三二
- 三 反対派プロツクの政治上および組織上の誤り……………三三六
- 四 若干の結論……………三三三
- 一 若干の一般的な問題について……………三三八
- 一 マルクス主義はドグマではなく行動への指針である……………三三八
- 二 プロレタリアートの独裁にかんするレーニンの若干の注意……………三四八
- 三 資本主義諸国の発展の不均等性について……………三五四
- 二 カーメネフはトロツキーのために道をきよめている……………三五九
- 三 信じられないほどの混乱、あるいは革命精神と国際主義にかんする
ジノヴィエフの見解……………三六八
- 四 トロツキーはレーニン主義を偽造している……………三七六
- 一 トロツキーの作品、すなわち「永続革命」の問題……………三七六
- 二 引用文による奇術、すなわちトロツキーはレーニン主義を偽造している……………三八七
- 三 「ささいなこと」と奇妙なこと……………三九三

五 反対派の実践綱領。党の諸要求	三九六
六 総決算	四〇〇
中国革命の見通しについて	四〇三

一 中国における革命の性格	四〇四
二 中国における帝国主義と帝国主義的干渉	四〇五
三 中国における革命軍	四〇八
四 中国におけるきたるべき権力の性格	四一〇
五 中国の農民問題	四一三
六 中国におけるプロレタリアートとプロレタリアートのヘゲモニー	四一七
七 中国における青年問題	四一八
八 いくつかの結論	四一九

事項訳注	四二二
人名訳注	四三四
スターリン年譜	四五二

一九二六年

一月——十一月

